

道具彫ノ輩モ彫刻家ヲ尊フ所ナリ

古来ヨリ道具彫ノ手ニ成リテ社寺佛閣等ノ裝飾金具ノ類ニ於テ
意匠ニ富タル物アリト雖モ一トシテ彫刻法備ハラズ美術トシテ
見ル可キ物ナシ而シテ道具彫等ノ為ス所ハ彫刻家ノ容易ニ為シ
得ル所ニシテ道具彫ハ之レニ反シ彫刻家ノ為ス所ハ容易ニ為ス
能ハザル所ナリ且ツ彫刻家ノ門ニ入りタル者ニシテ其ノ術ノ未
熟ナル者下リテ道具彫鑄師家形彫置物鑄等ニ移職セル者多シ
以上述フルカ如ク彫刻ト道具彫トハ大キニ其ノ趣ヲ異ニスル所ナ
リ然ルニ明治ノ初年庖刀ノ令発布セラレシヨリ以後裝劍彫刻家ハ
一般廢業ノ有様トナレリ道具彫置物鑄等ハ是レニ反シ元ヨリ家具
裝飾ノ専門ナルカ故ニ好機ニ乗シ一時盛ンニ花瓶香炉置物等ヲ製
シ明治十年博覽會等へ多ク出品シタリト雖モ一ツトシテ注目スベ
キ者ナシ彫刻家ニ於テハ其ノ趣キヲ一変シ諸器物ニ彫刻法ヲ應用
スルニ至リ漸時進歩シテ博覽會共進會等ニ製作出品セリ然ルニ裝
劍彫刻家ノ製作ニ係ル物ノ賞得道具彫等ノ手ニ成リタル物ニ賞與
アル事ナシ

是彫刻法ノ規矩アルト否トニ依テ然ラシムル所ナリ爰ニ於テ其彫
刻ニ差アル事明瞭ナルハ言ヲ俟ス然レモ現時純然タル彫刻法ニ依
リ彫刻シツ、アル者ハ実ニ指ヲ掘スルニ過キス是ニ反シ普通工藝
彫刻家ハ其數夥シキカ故ニ是等ノ區別ヲ判然ナラシメサル時ハ彫
金ニ於ケル本意定ラズ凶案等モ此ノ点ニ注意セサル時ハ終ニハ工
藝道具彫ト混雜シテ賤ム可キ彫刻法ト成ルノ憂ナキヲ保シ難シ
本校ノ如キハ純然美術ノ模範タル位地ニ在ルヲ以テ右ノ点ニ判然

區別ヲ要スルハ勿論ナリ故ニ前述ノ次第ヲ以テ工藝彫刻タルト美
術彫刻タルトノ區別明瞭ナラシムルヲ希望ス

工藝科ノ名称ヲ削除スル事

前述ノ如ク美術彫刻ト工藝彫刻ト區別アルニ於テハ本校ノ工藝科
彫金ト稱スハ甚タ遺憾トスル処ナリ是ニ付生徒モ工藝ト稱スルヲ
以テ賤ム如キ感アリ且ツ擔當教員ニ於テモ甚タ欲セサル所ナリ
併シ一般ノ物稱工藝ニアラサル者ナシト雖モ本校ニ於テハ單ニ彫
金料トシ工藝ノ名称ヲ削除アラン事ヲ切望ス

明治廿九年二月十八日

東京美術學校長

岡倉覺三 殿

加納 夏雄
海野 勝珉
向井 繁太郎

② 日本繪畫協會創立と本校日本畫教授陣の刷新強化

本年三月二十日、岡倉校長は日本青年繪畫協會と本校繪畫科卒業
生たちとを合体させて日本繪畫協會を創立した。同會の役員は左記
の面々で、會頭に公爵二条基弘が、副會頭に岡倉が就任した。

評議員 畑仙齡、尾形月耕、大出東臯、岡本勝元、大橋雅彦、梶

田半古、角田玉明、高橋玉淵、村田丹陵、村上委山、山
田敬中、松野霞城、福井江亭、小堀鞆音、寺崎広業、天
草神来、佐竹永村、西郷孤月、溝口宗文、下村親山、島

崎柳塙、菱田春草、望月金鳳、関保之助

幹事 岡本勝元、角田玉明、山田敬中、寺崎広業、望月金

鳳、関保之助

同会を中心の行事は毎年春秋に開く絵画共進会で、本年九月から十月にかけてその第一回が開かれた。出品は第一部（日本画旧派）、第二部（西洋画派）、第三部（日本画新派）に分けて行われたが、特に第三部は上記の若手有力画家たちをはじめ、京都の新進画家たちも力作を出品したので、非常な活況を呈し、日本画革新派の旗揚に相応しいものとなった。なお、第二部には黒田清輝率いる白馬会が参加してその第一回展を開催した。しかし、黒田らは岡倉路線に組み込まれるのを避けて、次回からは単独で展覧会を開くこととし、また、第一部に出品した旧派日本画家も同様に離れたので、日本絵画協会は第二回共進会以後、同会本来の趣旨であるところの日本画革新派の育成を旨として作品展を行うようになった。

日本絵画協会の創立は日本画革新派の活躍舞台ができたことを意味するが、岡倉校長は同会を創立しただけでなく、一方では同会の有力メンバーを本校の絵画科や図案科に採用し、日本画教授陣の刷新を図った。これは新設の西洋画科との対抗上、体制強化の意味も持っていたと思われる。これまで（二十九年当時）、絵画科には橋本・川端両教授のほかに狩野友信・下村観山・岡本勝元ら助教がいたが、このうち狩野と岡本が辞職し、代わって西郷孤月（二十九年四月採用。予備の課程担当）と本多天城（同年七月採用）が助教となり、また、横山大観（五月採用）も助教となった。さらに同年十一月には五ヶ月契約で小堀鞆音（絵画科）、寺崎広業（図案科）、菱田

春草（予備の課程）、山田敬中（美術工芸科）らも囑託として採用され、絵画科の空気はこれまでと一変したのであった。彼ら若手教官は絵画共進会前ともなれば校内の制作室で岡倉校長や橋本雅邦の指導のもとに競って制作に励んだ。

左記は当時の絵画科に関する消息並びに回想であり、参考までに掲げておく。

○美術界の消息

先日ハ洋風美術界の一二讀者へ御報申せしところ今日ハ日本風の彼是消息可仕候

◎住吉派の畫家として知られたる山名貫義氏は、是迄東京美術學校の第一期即ち古きところを受持たれ候に此程辭任し「二十八年十二月―編者註」此部も橋本雅邦氏の監督に歸し候由此事少くも同校の意嚮を知るに足る様存せられ候

◎先月の日本繪畫協會展覽會の一隅、同所にお顔揃へられし寺崎廣業・山田敬中・小堀鞆音三氏の佛畫歴史畫は、いづれ場中の尤物ならぬハなけれど、其後審査にも揃つて銅賞を得られたるに、此程又々お揃ひにて美術學校の囑托教師に聘せられ、寺崎氏ハ足利時代より徳川前期に至る第二期に就て橋本教授を助け、山田氏ハ第三期徳川後期の新らしき所に就きて師弟の間柄なる川端教授を助け、小堀氏は第一期の古き所にてお得意の歴史畫を教へ居らるゝよし、此三人前世如何なる宿縁にや、何も彼もお揃ひの御繁昌とはめでたし／＼

◎美術學校の卒業生菱田三男雄氏は、昨年卒業成績展覽會には

寡婦の圖を出だし、今秋の繪畫協會には四季の山水を掲げて一等褒狀を得たる人なるが、前記の三氏と共に同校に入りて囑托教員となり、豫備科を擔任せるよし、洋畫科には藤島、和田、岡田の三氏あり、岡倉校長にハ昨今青年家網羅策をも講ぜらるゝと相見え申候

◎美術學校にてハ洋畫科入りてより件の天神さま然たる制服は稍や排斥せられ、昨今ハ着るも着ざるも殆ど勝手の様相成り、從來の生徒も此『天神さま』には年來閉口致居候ものと相見へ、心中大に悦び居候趣、年少銳氣の學生が件の道服は誰が眼にも感心致さず、追ては之を時偶まの禮服と爲し、平生は彼白馬會員の徽章の如き平打紐に爲すやの説有之候〔下略〕

(明治二十九年十二月十七日『毎日新聞』)

鳥谷幡山(明治二十九年九月、平福百穂とともに絵画科撰科第二年に入学。三十一年、いわゆる美校騒動で退学。)の回想

美校々風と岡倉校長

美校へ入学して驚いたことは、私を町絵師上りの広業門下が入学したと輕蔑しながら、彼等一二年生を通じて下手さ加減は呆れた者だ。後に虎描きの小川友郷と魚描きの橋本静水位が関の山であった。而も寒い時は火鉢を擁して画論を闘はして大氣焰を挙げ、又修業上の怠慢振りも唾棄すべきであるが、更に助教授等が卒業間際の生徒と余り年が違はぬから、何かに付けて仲の悪いことである、例えば春草と孤月が朝夕校門で彼等と出会すと、性

分かは知らぬが、一人が何んすると言へば、一方は何ツニと互に肩を聳やかして衝突する無様さは、殆んど下町職人風情の喧嘩のやうな事を屢々演出するのであった。

〔中略〕〔岡倉先生は〕語学は弟の由三郎氏(高等師範の外国語教員)と共に非常に堪能で、外人との話は自由自在で殆んど談笑の間に交はされるのであった。而も軀幹長大威風堂々、顔面は支那帝王中によくある豊頬圓滿な威嚴ある相貌で、世に稀なる釣上った鳳眼は笑へは兒女も親しみ、怒れば勇者も潜むと云ふ程であった。而して古今の学に通じ仏教や哲学にも精はしく詩文にも達していた。当時専科である私は時偶講堂で美学の講義を聞いたが比喻対照等にも妙を得てゐる。今記憶してゐるのは彼の王維の空山不見_レ人の結句で、普通詩人なら又青苔の上を照すと云ふのを原詩的に亦照青苔_上と言はれたのが、如何にも詩的であり余韻嫋々たるものであった。〔下略〕

(『回顧六十年』鳥谷幡山。昭和三十三年十月。鳥谷画房)

③ 卒業生会結成

本校卒業生の団体としては保有会があつたが、明治二十九年一月、岡倉校長の指示により、一層強固な団体である卒業生会が結成され、錦巷会と命名された。この間の事情は『錦巷雜綴』第七卷(明治二十九年三月三十日発行)に次のように記されている。

○卒業生會の新年會、過る一月十一日在京の卒業生一同湯島天神境内魚十に相會して新年會を兼ねて會則を討議せんため一大會を